



Title	両大戦間期の日英両帝国経済圏をまたぐ「商品連鎖」—越境するマガジ・ソーダとガラス製品—
Author(s)	玉村, 紳
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/93015
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (玉村 紳)

論文題名

両大戦間期の日英両帝国経済圏をまたぐ「商品連鎖」
—越境するマガジ・ソーダとガラス製品—

論文内容の要旨

戦間期に於いて、当時のイギリス領東アフリカ産の天然ソーダであるマガジ・ソーダが日本とイギリス領インド（以下、インドと略す）に輸出され、イギリス製合成ソーダ灰の両国への輸出を妨げた。次いで、マガジ・ソーダを主原料として生産された、日本とインドのガラス製品もヨーロッパ製ガラス製品の輸入を妨げた。その間、インドは大量のガラス製品を日本から輸入し、さらにその一部をイギリス領東アフリカに再輸出した。さらに、1930年代になるとイギリス領東アフリカは大量のガラス製品を日本から輸入するようになった。すなわち、ソーダとガラス製品によるアジアとアフリカを循環する貿易構造が出現した。

著者は本論の課題として、「なぜ」そのような貿易構造が出現したかを考察する。この課題設定において、著者は上述の循環する貿易を、「グローバルな商品連鎖」¹の歴史的事象の一つととらえ、グローバルヒストリー研究における、「比較、接続そしてグローバルとローカルの相互作用」²に着目する、また、本論が対象とする戦間期は「帝国主義の時代」であり、当時のイギリス帝国と日本帝国という2つの帝国経済の関係性という観点も視野にいれる。

本論は、これらの歴史学のフレームにおいて、杉原薫の提唱する「東アジア型経済発展経路」論³における、戦間期のアジアの工業化研究の文脈に位置する。その一分野である化学工業の発展経路において、イギリス領東アフリカ産のマガジ・ソーダが日本とインドの化学工業に与えた大きな影響（「マガジ・インパクト」）により、ソーダ灰⁴を中間投入財とする化学工業製品である日本のガラス製品が、インドを「環インド洋貿易圏のノード」⁵とし、東アフリカにまで拡張された「アジア間貿易」⁶のひとつの輸出品として、流通していたことに着目する。そして、中間投入財であるマガジ・ソーダのサプライチェーンと、最終製品であるガラス製品のバリューチェーンとの接続による「商品連鎖（コモデティーチェーン）」が形成されていたことを明らかにすることにより、杉原論に対して、ミクロ経済的な補論を提示せんとする。

そこにおける本論の課題として、ソーダとガラスの「商品連鎖」の形成における、日英両帝国の「グローバルとローカルの相互作用」を明らかにすることが必要となる。その方法論として、著者は近年提唱されつつある「間一帝国史研究」⁷の概念と手法を敷衍することを試みる。すなわち、対象とする時代の「人、知識および物の動きと帝国間の協調の形成」⁸の過程に着目することにより、両帝国間での化学製品貿易における「グローバルとローカルの相互作用」の詳細を考察する。具体的には、まず、マガジ・ソーダの開発・輸出入と日本のガラス製品のイギリス帝国経済圏への輸出の「連鎖」、⁹が以下の4つのステップから成り立っていたことを明らかにする。

第一に、20世紀初頭、天然資源の開発と輸出に依存していたイギリス領東アフリカの植民地経済の例外的鉱物資源であったマガジ・ソーダが、イギリスと日本の多国籍商人たちによって、当時勃興しつつあったアジアの化学製品市場と接続（連鎖）し、アジアの化学工業へのサプライチェーンが形成された。

第二に、1920年代から1930年代初頭、日本とインドに輸出されたマガジ・ソーダは、当時のイギリス本国のブラナー・モンド社の両国市場での寡占を脅かすと同時に、ソーダ灰の苛性化による苛性ソーダの国産化の可能性をひらく「マガジ・インパクト」を与えた。しかしながら、その後の日本とインドの化学工業の異なる発展経路とその帰結としての両国のソーダ灰の市場価格差は、両国のガラス工業の中間財調達コストの差として連鎖した。

¹ S. Topik, C. Marichal and Z. Frank (eds.), *From Silver to Cocaine: Latin American Commodity Chains and the Building of the World Economy, 1500-2000*, Duke University Press, 2006.; Bernd-Stefan Grew, Karin Hofmeester (eds.), *Luxury in global perspective: objects and practices, 1600-2000*, New York, Cambridge University Press, 2016.

² Tirthankar Roy and Giorgio Riello (eds.), *Global Economic History*, London, Bloomsbury Publishing Pic, 2019, pp.9-11.

³ 杉原薫 前掲書、75—78頁。

⁴ ソーダ灰：工業用炭酸ナトリウム (Na₂CO₃)。

⁵ 鈴木英明 編著『東アジア海域から眺望する世界史』明石書店、2019年。

⁶ ここでの「アジア間貿易」とは、杉原薫の主張する「ウエスタン・インパクトに対するアジアの対応を表現する一つ概念」を指す：杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房、1996年、15頁。

⁷ Danie Hedinger, Nadia Hee, 'Tansimperial History – Connectivity, Cooperation and Competition', p436.

⁸ Ibid., p439.

⁹ ここでの「連鎖」とは、同時多発（確率分布）的ではなく、ある事象が時系列的に別の事象を引き起こす因果関係をもって、順次発生してゆくことをさす。

第三に、第一次世界大戦を画期とするアジア市場からの欧州製ガラス製品の後退による代替需要は、日本とインドのガラス工業の製造と流通コストの差異による国際競争力の帰結としてのガラス製品の「アジア間貿易」として連鎖し、インド市場での「棲み分け」¹⁰によって共有された。その背景には日本のガラス製造業者および輸出関連業者とインド商人ネットワークとの接続によるガラス製品のバリューチェーンの存在もあった。

第四に、日本とインドのガラス製品の「アジア間貿易」は「環インド洋圏貿易」¹¹とインド商人ネットワークにより接続し、日本のガラス製品は東アフリカに再輸出されるという連鎖がおこった。また、1930年代の東アフリカの経済とアフリカ人消費者の変化は、東アフリカ市場の隅々まで行き渡ったインド商人の物流と情報のネットワークにより、日本のガラス製造業者および輸出関連業者へ接続されることによって、最終的に、日本とイギリスの帝国経済圏をまたぐ「商品連鎖」（コモディチェーン≒サプライチェーン&バリューチェーン）が形成された。

以上のような4つのステップを経て、イギリス領東アフリカ原産のマガジ・ソーダとそれを中間投入財として製造された工業製品たる日本製ガラス製品は、最終的にイギリス領東アフリカに還流し、東アフリカとアジアとを循環する貿易構造が完結した。よりマクロな日英両帝国間の経済の相互作用という観点から見ると、当時の日本の化学工業の発展とともに、イギリス領東アフリカが日本からの工業製品輸入と第一次産品の輸出を行うという分業と、その貿易の決済がスターリングによってリンクした、日英両帝国経済圏をまたぐ遠隔地貿易であった。また、1930年代のロンドン・シティのジェントルマン資本主義による東アジアとアジアのイギリス帝国スターリング圏との補完関係¹²が、インドをハブとしてイギリス領東アフリカ、さらにはコンゴ盆地自由貿易圏にまで拡張されたものであった。さらに、この貿易構造は、イギリス帝国が「帝国航路」を開放しつつ、日本帝国の海運インフラを取り込んで「帝国間航路」¹³を共有することによって、日本との「帝国間貿易」¹⁴が拡大し、イギリス帝国にとっての利益（貿易収入と植民地への民需品の安定供給）をもたらすものであった。その一方で、日本帝国は貿易収入もさることながら、帝国圏のみでは自給できない、化学工業製品製造に不可欠な天然ソーダや工業塩の調達を確保せんとするものでもあった。すなわち、この戦間期の日本とイギリスの自由貿易である「帝国間貿易」は、両帝国にとって当時の帝国経済維持への寄与という点で相補性を持ちつつ、1941年まで存続した。

この歴史研究の主張は、複合的な経済依存関係を解明する、グローバル経済史とアフリカ地域研究、南アジア研究および地域間比較研究（trans-regional research）との接続めざし、今後発展するであろう「間・帝国研究」の一つの新しい可能性を切りひらくものとする。また、直接的には杉原の提唱する「アジア間貿易」（intra-Asian trade）論をアフリカに拡張することを可能とし、また、A. G. ホプキンスの2009年の「新しい」アフリカ経済史への問題提起¹⁵に対する最近のアフリカ史研究の動向¹⁶に対してアジアからの見解を発信しうるものとする。さらに、筆者が主張する「拡張アジア間貿易」（extended intra-Asian trade）論は世界経済（世界システム）におけるアジア諸国の「相対的自立性」のみならず、イギリス領インドを超えて、東アフリカ沿岸部や南米といったイギリスの公式・非公式帝国圏に接続していたという、独自性と経済発展のダイナミズムをも確認するものである。また、この論点は、1930年代の世界経済は保護貿易主義（経済ブロック化と求償貿易）が支配的で硬直していったとの従来の解釈に対して、1930年代においても、ミクロの経済活動では経済合理性に基づく自由貿易の希求による「グローバルとローカルの相互作用」が存在したとの主張を、日本・アジアからの視点で可能とするものとする。

¹⁰ ここでの「棲み分け」とは、戦間期のインドにおいて、日本製のガラス製品とインド製ガラス製品とが、前者が主として沿岸部消費市場を、後者が内陸部消費市場とでシェアを分け合っていたことを指す。

¹¹ Philippe Beaujard, *The Worlds of the Indian Ocean A Global History Volume II*, Cambridge: Cambridge University Press, 2019.

¹² 杉原薫 前掲書、417-429頁； 秋田茂、籠谷直人編、『1930年代のアジア国際秩序』 溪水社 2001年。

¹³ ここでの「帝国間航路」とは「帝国航路」（木畑の定義するところの、イギリスからインド、東南アジアを経由して日本につながる航路全体をさす： 木畑洋一、『帝国航路を往く イギリス植民地と近代日本』 岩波書店、2018年 2-3頁）を、コロンボから分岐して、アフリカ東岸を経由して南米東岸をカバーする、イギリスと日本の公式、非公式帝国経済圏間を縦貫する航路をさす。

¹⁴ ここでの「帝国間貿易」とは「帝国間航路」によって輸送された、戦間期の日本とイギリスの公式および非公式帝国経済圏間（アジア、東アフリカおよび南米東岸）の貿易をさす。

¹⁵ 「（アフリカ経済）歴史学者たちは、アフリカの経済発展の歴史を、アフリカ起源ではなく西欧社会に起源を持つ研究テーマを選ぶことにおいて、直面する貧困問題の起源から目を背けている」： A. G. Hopkins, 'The New Economic History of Africa', *Journal of African History* 50, London, 2009, p.155.

¹⁶ Jerven Morten, *The wealth and poverty of African states: economic growth, living standards and taxation since the late nineteenth century*, Cambridge University Press, 2022.

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (玉 村 紳)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 秋田 茂
	副 査 大阪大学 教授 藤川 隆男
	副 査 大阪大学 教授 ナディン ヘー
	副 査 大阪経済法科大学 教授 脇村 孝平
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：両大戦間期の日英両帝国経済圏をまたぐ「商品連鎖」―越境するマガジ・ソーダとガラス製品―

学位申請者 玉村 紳

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	秋田 茂
副査	大阪大学教授	藤川 隆男
副査	大阪大学教授	ナディン ヘー
副査	大阪経済法科大学教授	脇村 孝平

【論文内容の要旨】

本論文は、両大戦間期の 1920-30 年代のアジア・インド洋海域において、ソーダ灰とガラス製品によるアジアと東アフリカを循環する貿易構造が、なぜ出現したのかを考察することで、日英両帝国圏をまたぐ「商品連鎖」が形成され発展した実態を解明する。考察対象として、英領東アフリカ産のマガジ・ソーダと日本・英領インドのガラス製品に着目し、戦間期における日英両帝国間関係を再考する。

「序章 商品連鎖と帝国」では、グローバル経済史研究の「商品連鎖」(commodity chains)論に基づく「グローバルとローカルの相互作用」の具体例として、アジアのソーダ化学工業の発展に着目し、中間投入財としてのマガジ・ソーダが日英印三か国の化学工業の発展に及ぼした影響「マガジ・インパクト」を検討課題として掲げる。

「第 1 章 20 世紀初頭のイギリス領東アフリカにおける植民地開発」では、20 世紀初頭に英領東アフリカの鉱物資源であった天然のマガジ・ソーダが、英日両国の多国籍商人によって、形成期の日本と英領インドの化学製品市場に輸出され、アジアの化学工業への「サプライ・チェーン」が形成されたことを概観する。

「第 2 章 日本とインドの化学工業化とマガジ・ソーダ」では、第一次世界大戦期の日本とインドの化学工業の草創期にあって、英領東アフリカから大量に輸入された天然の輸入マガジ・ソーダがもたらした、安価な中間投入財としての「衝撃」、第 1 の「連鎖」を確認する。次いで、1920 年代の両国において、ソーダ灰市場（ガラス産業にとっての素材）へのソーダ灰供給の差異（イギリス本国の帝国化学会社 ICI による輸出独占と、それへの対抗措置としての輸入代替化政策の推進の有無）が、両国ガラス工業の発展経路に多大な影響を及ぼしたとする、第 2 の「連鎖」を明らかにする。

「第 3 章 日本とインドのガラス工業の国際競争と協調」では、20 世紀転換期以降のインドと日本の近代ガラス工業の黎明期を概観する。その後 1930 年前後のインドのガラス製品市場における内陸部での国産インド製品と沿岸部での輸入日本製品の「棲み分け」は、競争と協調によるインドと日本の「アジア間貿易」を構成した要素の一つであったのではないかという仮説の検証を試みる。また、この「アジア間貿易」の背景にあった日本とインドのガラス工業の雁行型発展により、日本製ガラス製品がインドで「環インド洋圏貿易」と接続し、東アフリカ市場へ再輸出されるという第 3 の「連鎖」を明らかにする。

「第 4 章 環インド洋貿易と「アジア間貿易」の接続」では、まず、20 世紀転換期にいたる東アフリカにおける

近代ガラス製品の交易の状況を概観する。ついで、1926年の日本と東アフリカ間の直行（帝国間）航路開設にいたる、イギリスのP&Oを盟主とする欧州極東海運同盟と日本の海運会社（日本郵船と大阪商船）との競争と協調の経緯をたどるとともに、その後、南アメリカ東岸にまで延伸した航路によって拡大したイギリスと日本の両帝国経済圏をむすぶ貿易の構造を明らかにする。さらに大恐慌以降の1930年代の東アフリカとの貿易構造の変化を、ガラス製品を事例に、現地のアフリカ人消費者の主体的な消費性向の変化と関連づけて考察する。その分析を通じて、1930年代後半にピークを迎えた英領東アフリカへの日本雑貨の輸出が「商品連鎖」の帰結であったとする仮説の検証を試みる。

「終章」では、マガジ・ソーダとガラス製品の東アフリカー日本ーインドー東アフリカという、循環する貿易の発展経路の形成・発展を規定した諸要因を整理すると共に、日中戦争の余波を受けた1937年の日本による貿易統制の開始に端を発し、1941年の第二次世界大戦の勃発で決定的となった一連の「商品連鎖」の終焉の過程を明らかにする。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、以下の三点で独創性とメリットを有する優れた研究である。

第一に、マガジ・ソーダという化学工業の中間投入財を事例として、日本、英領インド、英領東アフリカの三地域にまたがる地域間貿易の形成と発展の過程を、日本経済史、インド経済史、およびイギリス帝国史それぞれの先行研究を適切に踏まえ、提示することに成功している。とりわけ、日英印三か国の化学工業に対しマガジ・ソーダが与えた影響を、「マガジ・インパクト」という独自の用語で捉え、その内実を三つの仮説で多面的に検証している。日印両化学工業史の相互比較と関係性という、グローバルヒストリー研究のキイ概念を使って、両大戦間期、とりわけ1930年代の国際経済秩序の再考を実証的に試みた意欲的研究である。

第二に、アジア経済史の文脈では、杉原薫が提唱した「アジア間貿易」論を、環インド洋貿易圏と接続する「拡大アジア間貿易」論の構築に成功している。その過程で重要な役割を果たしたインド人商人のネットワーク、ブラナ＝モンド社（後の帝国化学会社 ICI）、鈴木商店や大阪商船という日本企業など、民間の商人・企業の実態を明らかにしている。さらにインド経済史で続く「植民地工業化」論争に関しては、T. ロイに代表される修正主義論の立場を補強するインド経済社会内部の固有の社会・文化的諸要因の規定性を確認している。19世紀後半から膨大な研究蓄積がある南アジア経済史研究でも、新たな問題提起を行っている。

第三に史料面では、ブラナ＝モンド社の経営史料、日本のアジア歴史資料センター・外務省外交史料館(JACAR)や『自由通商』『大阪商工会議所月報』、英領インドでは、インド政庁の産業委員会・財政委員会の各種報告書、英領東アフリカの植民地報告書など、文字通り多角的なさまざまな史料を相互に突き合わせて検討し、帝国間の諸関係を探求する「間帝国史」(transimperial history)、マルチ・アーカイヴァル研究としても評価できる。

以上の様な優れた諸点にもかかわらず、問題がないわけではない。本論文のキイ概念である「商品連鎖」に関して、化学工業の中間投入財に関する「サプライ・チェーン」とガラス製品に関する「バリュー・チェーン」という概念が、「商品連鎖」論のなかでいかにつながり関係するのか、明快な説明が欠如している。また、本論文では1930年代に関しては、マガジ・ソーダとガラス製品を事例に、広域の帝国間貿易における「モノ」と「ヒト」のリンク（連鎖）は描けているものの、ロンドン・シティを中核とするスターリング圏の存続や、日本円・インドルピー貨の為替レートの問題（通貨切下げ競争）、貿易決済手段としての通貨「カネ」への言及と分析が不十分である。

しかし、そうした残された諸課題のために、本論文の価値が大きく損なわれるものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。